

【背景】東日本大震災は約 18470 人が亡くなる大惨事であった。このような traumatic events の後には、住民(survivors)だけでなく rescue workers も精神的ストレスを受けることが知られてきている。我われは、東日本大震災の急性期救援活動に従事した災害派遣医療チーム (DMAT) 隊員を対象に行った調査で、救援活動直後の精神的苦痛 (PDI) およびテレビの視聴時間が震災4ヶ月後の PTSD 症状を予測することを既に報告した(Nishi D et al, PLoS One, 2012)。救援者の精神的ストレスに関しては、すでに多くの先行研究がある。たとえば、9. 1 1テロ後に派遣された fire fighter を主とした rescue worker のうちの 16.7%が PTSD、21.7%が depression に 13ヶ月後に罹患した。Rescue worker の支援活動後の PTSD 予測因子として、怒り、身体化、喫煙などが挙げられている。しかし、Medical rescue workers (医師、看護師、その他) を対象にした研究はそれほど多くはなく、特に救援活動直後から長期にわたって縦断的に精神健康を調査した論文はない。また、PTSD のような psychopathology よりも頻度が高いものとして、Burnout (燃え尽き症候群) がある。医療関係者の burnout については非常に多くの論文があり、その重要性も広く認識されているが、震災時に救援活動を行った Medical rescue workers の震災後の burnout について調査した論文はない。震災後4年を経過した現在における DMAT 隊員の精神的ストレスを縦断的に調べることは、救援者の精神健康対策を検討する上で重要である。

【目的】東日本大震災で救援活動に従事し、先行研究に参加した DMAT 隊員の4年後の PTSD 症状および burnout の予測因子を縦断的に検討した。

【対象および方法】日本DMAT事務局のMLを利用し、2011年の研究参加者に追跡調査を通知し、webまたは郵送で質問紙への回答を依頼した。直後の精神的苦痛は、Peritraumatic Distress Inventory (PDI) で評価した。4年後の PTSD 症状は Impact of Event Scale revised (IES-R)、burnout は Maslach Burnout Inventory (MBI) で評価した。IES-R 及び MBI の得点を従属変数、PDI の得点を独立変数、初回調査で調べたそのほかの要因を調整変数として重回帰分析を行った。

【結果】2011年4月2日から22日の間に、活動に従事した DMAT 隊員 1,816 名中 254 名が研究に参加し、254 名中 188 名 (回収率 74%) から回答を得た。重回帰分析の結果、救援活動直後の精神的苦痛 PDI 得点は 4 年後の IES-R ($\beta = 0.35, p < 0.01$) および MBI ($\beta = 0.21, p < 0.01$) を予測し、派遣前ストレスは 4 年後の MBI ($\beta = 2.61, p = 0.04$) を予測した。

【考察】派遣前ストレスや活動直後の精神的苦痛の評価が、救援者の精神健康増進や離職・休職の予防に繋がる可能性が示唆された。この結果を踏まえ、これまでは支援活動を行った DMAT 隊員の派遣後のストレスチェックを行ってこなかったが、2015年9月に発災した茨城県を主とする豪雨災害をはじめとして、以降の災害において支援活動を行った DMAT 隊員に対し、本研究で使用した質問紙を用い、継続的なフォローを行っている。